
哀しき愛

usa

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

哀しき愛

【Nコード】

N0237BA

【作者名】

usa

【あらすじ】

彼とずっと一緒だと思っていた。

彼の一番近くにいるのは、私だと思っていた。

彼女が現れる前は…。

彼女さえ、いなければ。

彼女さえ、いなくなれば。

お願い、彼を返して…！

パラレルです。

新蘭ですが、一部新志な表現もあります。

暗い志保ちゃんは見たくないという方はback願います。

気持ち

私の名前は宮野志保。

一七歳、高校二年生。

家族はいない。

十年前、私の両親と姉は事故で亡くなった。

それ以来、私は遠縁の阿笠博士に引き取られて暮らしている。

博士は優しい人。

突然現れた私を、何のためらいもなく受け入れてくれた。

時々変な発明とかしたりするけど、私にとっては父のような存在。

でも、どこか違うのを感じていた。

私と博士には、やはり何か壁のようなものがある。

本当の親子ではないんだから、当然といえば当然だけど。

少し、寂しい。

それでも私は、ここが好きだった。

風変わりな老人の家、隣には大きな洋館。

小学校には銀杏並木があり、秋になるとそこをよく通って帰っていた。

隣にいるのは、サッカーボールを蹴っている彼。

リフティングに百回成功したと言って、彼は私に向かって、歯を見せて笑っていた。

私は呆れながらも、笑みを返した。

こういう時間が、何よりも幸せ。

博士というよりも、学校で本を読んでいる時よりも。

私の大切な時間。

大切な彼。

私の…好きな人。

キラキラした笑顔が好き。

少し子供っぽいところが好き。

何もかもお見通しだっという表情が好き。

彼の全てが、好き。

私と彼、工藤新一は幼馴染。

私が米花町に来たばかりの頃、隣に住んでいる彼は、気さくに私に話しかけてくれた。

最初は別に、なんとも思ってた。なかった。

ホームズ、事件、サッカー好きの、ちょっと変わった男の子。

それぐらいにしか思ってた。なかった。

私の彼に対する気持ちが変わったのは…そう、中学一年の六月。

帰る頃になって、突然雨が降り出した。

私はその日、傘を持っていなかった。

昇降口で雨がやむのを待っていると、私の前に、青い傘が差し出された。

「ほらよ。これ使えよ」

工藤君はそう言って、私に傘を持たせた。

そのまま一人で走り出した彼を見て、私は別の傘はあるの？と声をかけた。

「バ―口。オレは探偵だぜ？こういうことは想定済みだよ。ちゃんここに、折り畳みの傘が入ってたんだよ」

バッグを得意気に叩く。

「そう…。なら、借りてくわよ」

「おう。オレ寄るところあつから、じゃあな！」

しばらくして私は気付いた。

彼、昨日折り畳みの傘壊れたって…。

次の日、彼は風邪をひいて学校を休んだ。

呆れる半面、嬉しかった。

自分よりも私のことを思ってくれたことを。

この日から、私は彼に夢中になっていた。

例え幼馴染でも、彼の一番近くにいるのは私。

これから先も、ずっと。

そう思っていた。

気持ち（後書き）

私パレル好きだな…。

これからよろしくお願いいたします> ((<

日常

朝、博士が起きる前に私は目覚める。

今まで自炊していたのが嘘みたいに、料理が苦手な博士。

今では家事は、私の担当。

キッチンに立って、朝食の支度を始める。

卵を三個取り出した。

なぜ三個なのかは、今にわかる。

卵を割って目玉焼きを作っていると、チャイムの音が鳴る。

普通だったら、こんな朝から…と思うけど、ここでは至っていつものこと。

私は急いで玄関に向かった。

「おっす」

「朝から元気ね」

寝癖も直さないままに、工藤君はずかずかと上がり込む。

その無防備な様子も、私にとっては愛しい。

「博士は？」

「まだ寝てるわ」

そんなことを言っていると、上の方から物音がした。

博士が欠伸をしながら降りてきた。

あゝあ、あんなにお腹が出ちゃって…。

そろそろ本格的に、カロリー制限させなくちゃね。

「はよ、博士」

「ん？ああ…新一君か。今日は早いの」

「今日はサッカー部、朝練あるんだってよ」

それを聞いて、私は不思議に感じた。

「あなた、部活はやめたんじゃない？」

「そのつもりだけどよ…中道が今度の大会だけでもって言うからさ」

そう言うと、彼はテーブルに置いてあった紅茶を勝手に飲んだ。

「じゃあねえから、その試合だけ出てやめる」

「きつとその次まで、ってくるわよ」

「断るよ、その時は」

どうかしら、と私は呟いた。

でも、彼には部活をやめてほしくなかった。

サッカーをやっている時の彼は、すごく楽しそうだから。

「はい、できたわよ」

「サンキュー」

目玉焼きとソーセージ、トーストを二人の前に置く。

練習があるからか、工藤君はがつついて食べていた。

「もう少し落ち着きなさいよ」

「そうじゃぞ。せつかく志保君が作ってくれたご飯を…」

だけど、彼はさっさと食べ終わって、紅茶でトーストを胃に流し込んでいた。

「わあってるよ。んじやな。先行くぜ、宮野」

「はいはい」

あの髪で行く気かしら…。

多少の不安は残るけど、私は手を振って見送った。

至って普通の朝。

こんな普通の毎日が続いていくに違いない。

彼と博士にご飯を作って、彼を見送って、自分も学校に行って…。

一緒に帰って、買い物に付き合ってもらったり、少し寄り道をした
り。

またご飯を作って、興味もない事件の話を聞かされて。

そんな日が続いていくと思っていた。

彼女が現れるまでは。

転校生

工藤君が出ていった後、私は一人で学校に向かう。

正直に言って、私には友達と呼べる人は少ない。

この性格だし…ね。

教室のドアを開けると、一瞬だけ視線が集まる。

私だとわかると、皆おしゃべりを再開させる。

私は自席に向かうと、バッグを置いて、隣に向かっておはようと言った。

「おはよ、宮野さん」

鈴木さんは笑うと、また他の子と話しはじめる。

鈴木園子さんは、わたしと話してくれる、数少ないクラスメイトの一人。

大体の女子は、私が工藤君と仲が良いからと、勝手に憎んでいる。

私に対する陰口が少なくないことも知っている。

まあ、言いたい人は言っていれば良いわ。

「ねえねえ聞いた？今日は転校生が来るらしいよ。しかも女子の！」

他の女子が話しているのが聞こえてきた。

「へーえ、どんな子だろ」

「さあ。美人かな？」

「優しい子だといいね」

興味はないわ。

私は本を取り出すと、しおりが挟んであるページを開いた。

しばらくすると、ドアが開いて、サッカー部の部員が入ってきた。

私はチラッとそちらを見て、工藤君の姿を確認した。

「おい、何盛り上がったんだよ？」

中道君が女子の話題に割り込んでいる。

「今日、転校生が来るんだってさ」

「何？女か？」

「そうだって」

すると、相沢君まで面白がって加わった。

「美人か？」

「知らない」

「可愛い子だったらアタックしてみるか」

「無理無理！」

クラス中がワツと笑いに包まれた。

やがてチャイムが鳴って、担任が後ろに、別の学校の制服を着た女子を連れて入ってきた。

男子がざわめいたのがわかる。

「毛利蘭といいます。よろしく願いします」

毛利さんは大きな目を皿のようにして笑った。

長い黒髪がふわっとなびいた。

美人

この一言がびったりな人だった。

でも嫌みがない。

優しい顔をしていて、女子もすぐに好感の目になった。

でも…彼は違うわよね。

私はそっと、斜め後ろの席の工藤君を盗み見た。

だけど、なぜかしら。

工藤君が一番、彼女を真剣な目で見ている気がする。

気のせい…よね。

だけど、私の考えは違っていた。

毛利さんは工藤君の隣の席。

つまり、私の後ろ…。

彼女は、席に座る直前に、小さな声で言った。

「久しぶりだね。新一…」

彼女

久しぶり？

新一？

私の頭の中に、その言葉ばかりがぐるぐると回る。

二人は、知り合い？

だけど、私がたずねる前にホームルームは終わり、クラスは元の騒がしさを取り戻した。

女子がわっと毛利さんの周りに集まる。

「よろしくね、蘭ちゃん！」

「部活は？何かやってた？」

「彼氏とかいる？」

「私たちとも仲良くしてね」

毛利さんはポカンとしつつも、笑顔を絶やさなかった。

「ありがとう」

そう言って微笑む彼女は、天使のようだった。

「あ、一時間目って体育だっけ？」

「やっぱ。着替えなきゃ！」

「更衣室行こー」

「あたしらトイレで着替えるー」

時計を見ながら、女子が動き出した。

そういえば、私も制服のまま…。

私も席から立つと、ジャージを手を取った。

二人一組

この台詞が教員から出てくると、無性にため息をつきたくなる。

私にはペアになってくれる人がいない。

皆さつさと決めていくし、わたしと仲良くしようとする人もいない

から。

私が一人でやっている、教員は必ず怒る。

それを影でクスクス笑っている人もいた。

でも、今日は違った。

私がいつも通り、バレーボールを持って一人で端の方へ行こうとすると、後ろから声をかけられた。

「あの、一緒にいい？」

毛利さんは遠慮がちに言うと、上目使いに私を見た。

どうやらいくら一瞬で気に入られたとはいえ、その日からグループに混ぜてもらえたわけではないらしい。

「いいけど」

「ほんとに？良かったあ」

彼女の華のような笑顔に、私もつられるように笑った。

「それじゃ、えっと…」

「志保よ。宮野志保」

名前を教えると、彼女はなぜか私の手を握った。

「よろしくね、志保さん！」

「え、ええ…」

周りから冷たい視線を感じた。

私が彼女と仲良くなるのが気に入らないらしく、女子が数人こちらを見ていた。

毛利さんは気付いていないのか、無邪気に私の手を引いて歩き出した。

「志保さんは、こっちに来てからの私の友達一号ね」

バレーのレシーブ練習の合間、彼女は言った。

「こっちにはあんまり知り合いがなくて…色々教えてね」

それを聞いて、私はさっきの工藤君と彼女の会話を思い出した。

「あなた、工藤君と会ったことあるの？」

少し間を開けてから、彼女は頷いた。

「まあね。幼馴染なんだ。といつても、十年前の話だけど」

「幼馴染…？」

私は聞き返した。

「うん、そう。新一もね、十年前は私と同じ町に住んでいたの。家が近くて、両親も仲が良かったから、よく一緒に遊んでたんだ」

十年前といえば、私と彼が初めて会った頃。

その少し前に、彼はこっちに越してきたとは聞いていたけど…。

「アイツ、まだホームズの話とかしてる？ 迷惑でしょ。あのホームズオタク」

「そ、そう…」

「今はなんか、有名になってきてるみたいだけど、そのうち絶対変な事件に巻き込まれちゃうんだから。ねえ？」

その後も続く、彼の愚痴。

でもそれが、自分への嫌味に聞こえてくる。

まるで、私は彼のことを、こんなに知っているの、とでも言っている…。な…。

いや、聞きたくない。

彼女といたくない…！

そこで、ホイッスルの音が鳴った。

「はい、一旦集合！」

教員の号令で、私はホッとして彼女から離れた。

彼に一番近いのは私とっていた。

でも違う。

彼に一番近いのは、彼女なのかもしれない…。

夕ご飯

家に帰ると、私は一人で夕食の支度を始めた。

でも、頭に浮かぶのは彼女。

天使のように優しい笑顔で、誰からも好かれていて…。

敵わない。

敵いつこない。

あんなに素敵な人が、もしも彼を好きなら…。

私には到底、歯がたたない。

ため息をついていると、後ろから博士が来た。

「どうした、志保君」

博士はいつものように、優しく聞いてきてくれた。

「何でもないわ。夕飯、もうすぐできるから…」

私はそう言つと、包丁で野菜を切りはじめた。

「そうか…。そういえば、そろそろ新一君も来る時間じゃろ。腹を空かしておるぞ」

博士が時計を見ながら言った。

今日も彼は、きつとこの家で夕食を食べるはず。

そうだ。

例えば彼女と工藤君が幼馴染でも、私も彼の幼馴染の一人。

そして今、彼と一番時を過ごしているのは私…。

そう考えると、私は肩の力がすっと抜けた。

「そうね、博士…」

私は博士に返事をする、先程よりも軽快なリズムで包丁を動かした。

今日はカレーを作っている。

練習で空腹の彼のために、いつもよりも多めに。

早く来ないかしら…。

そこへ、私の携帯が鳴った。

表示されていた名前を見て、私は急いで通話ボタンを押す。

「もしもし？」

「ああ、宮野。もう飯、作っちゃったか？」

電話の向こうから聞こえてくるのは、工藤君の声。

「ええ。どうかしたの？」

私がたずねると、彼は少し気まずそうに言った。

「わりい。オレ、今日はパス」

「え？」

「友だちとこれから食いに行こうと…。あ、明日、お前の飯は食うからさ」

彼の必死な様子が目に浮かぶ。

「別にいいわ。気をつけてね」

「おう！」

そう言つと、彼はあっさり電話を切つた。

少し寂しいけど…仕方ない。

「新一君は来ないのか？」

「ええ、みたいよ」

「そうか。せつかくの夕飯が…」

博士が残念そうに眉をハの字にさせた。

「しょうがないわ。私達だけで食べましょう」

「そうじゃな…。わしもたっぷり食うぞ」

「博士はサラダ」

「え…？」

寂しさを堪えて、私はカレー作りに戻った。

でも、さっきよりもやる気が出ない。

私も意外と、現金な人だったのね…。

二人

結局、その日は工藤君に会うことはなかった。

何度か彼の家の方を見たけど、明かりがついてなく、真っ暗だった。

翌日、私はいつも通りに早めに起きて、朝食を作っていた。

今日こそは来てくれるわよね…？

そう思っていたけど、待てども待てども、彼は来なかった。

「やけに遅いのお、新一君…」

「寝過ぎしてるのかしら？」

「ありえるな…志保君、少し様子を見てきてくれんか？」

「はいはい」

私はコーヒーの入ったカップを置いて、いかにも面倒そうに立ち上がった。

心の中は、はずんでいるのに。

隣にある、彼の家チャイムを鳴らしてみる。

だけど、なんの反応もない。

もう一度押す。

結果は同じ…。

どうしたのかしら…。

私が工藤君の家を見上げていると、聞き覚えのある声がした。

「志保さん！」

なぜ…彼女がここにいるの？

なぜ、彼と一緒になの？

「おはよう、志保さん」

「お…おはよう」

私は上ずった声を出してしまった。

視線が上に行くと、彼がいつもと同じ笑顔で私を見ていた。

「よっ。わりいな。昨日はこいつんち泊まってたからよ」

泊まってた…？

「あ、こいつはオレの幼馴染でさ…」

「知ってるわ」

工藤君は少し驚いたような表情をした。

「蘭と話したのか？」

蘭…

「昨日体育の時ね。新一のお隣さんなんて、志保さんも大変ね」

新一…

「それどういう意味だよ？」

「そのまんまの意味よ」

名前で呼び合う二人。

仲の良い二人。

幸せそうな二人…。

逃げ出したくなった。

「宮野、遅刻すつから、早く行こつぜ」

「あんた、その頭で行く気？」

「あん？」

工藤君がきょんとしていると、彼の髪を引っ張る彼女。

「この寝癖、直してからにしろなさいよ」

「わ、わかったよ、いってえな」

私はここに無き者。

いない存在…。

「悪いけど、あなた達先に行つててくれる？」

これ以上、二人の傍にいたくない…。

「いいけど…どうかしたのか？」

「何でもないわ。すぐ行くから！」

そう言うのと、私は走り出した。

家の中に入つて、ドアを後ろ手で閉めた。

呼吸が荒くなっている。

「どうしたんじゃ、志保君。新一は？」

博士が慌てたように出てきた。

「大丈夫、起きてたから…」

「そ、そうか」

テーブルにはまだ、温かいコーヒーとトーストがあつたけど、食べる気にもなれない。

「博士、これ食べていいから」

「えっ？いい、いいの？」

私は答えないうまま、鞆を手にとつた。

「行つてきます…」

「き、気をつけるんじゃぞ」

博士に見送られながら、普段よりゆっくり歩く。

顔をうつ向かせて、絶対に二人の姿が見えないように…。

からかい

二人よりたつぷり二十分は遅れて、私はぎりぎりで学校に着いた。

教室のドアをそつと開ける。

だけど、今日は誰もこっちを見なかった。

それどころか、私が入ってきたことすら、全然気付かない。

皆何かに夢中になって、ひと塊りになっている。

私は気になりながらも、席に着こうとした。

でも、クラスメイトが邪魔で座れない。

輪の中心は私の席の後ろの、あの二人だった。

私は小さな声でごめんなさいと言って、椅子を引いた。

すると、ホツとしたような毛利さんの声が聞こえてきた。

「志保さん、ちょっと…」

「…何？」

クラスメイトの冷たい視線が刺さる。

「ねえ、志保さんからも何か言つてよ。何だか変なことになつちや

って…」

そう言われて、私は周りを見た。

思えば、全員が彼女と工藤君をニヤニヤしながら見つめていた。

「どうかしたの？」

すると、一人の女子が楽しそうに告げた。

「私さつき見ちゃったのよね。二人が手を繋いで、超仲良さそうに歩いてるところ」

「私も！もうラブラブな恋人？みたいな感じでさ」

彼女たちが顔を見合せながらねえ、などと言っているのを横目に、私は再び傷ついてた。

私と別れたあと、二人は手を繋いで…。

「ち、違っつてば！あれはたまたま…新一！あんたも何か言いなさいよ」

毛利さんが彼の名前を呼ぶと、男子達が口笛を吹いた。

「あの時はほんとに、私が転びそうになったから…」

「そ、そう！ただの事故だって」

二人が必死になって否定する。

「えゝ？そんなこと言って、ほんとには付き合ってたんじゃないの？」

鈴木さんが面白そうにたずねた。

そういえば、この人そういう話題好きだったような…。

「お似合いよ、お二人さん！」

鈴木さんが二人をからかうと、隣にいた子がポンと肩に手を置いて言った。

「そんなこといったらさあ…ほら」

チラッと私の方を見る。

一瞬ドキッとする。

この人はきっと、私が彼を好きだということを知っている。

「何よ？」

鈴木さんはつまらなそうに言い返している。

「わかんないの？それ言っちゃったら可哀想でしょ」

「誰が？」

「それはさ…」

クラスメイトの目が、段々私に寄ってくる。

勘弁して…！

「さつき虫が近づいてきたから、私が思わず新一に抱きついちゃったの！」

場違いな叫び。

毛利さんが顔を真っ赤にさせて息を整えていた。

「ら、蘭ちゃん…」

女子たちがポカンとしながら、彼女を見つめていた。

「これでいいでしょ。あれはたまたま起きた事故よ！」

そう言いきると、彼女は椅子に腰を下ろした。

「ほんとか、工藤く？」

男子達が面白くなさそうにたずねる。

「そ、そうだよ」

「だったら最初からそう言えよな」

「言っただろーが！」

やがて、二人の周りからクラスメイトも散りはじめた。

時折、女子が私に馬鹿にしたような目を向けてきた。

たぶん彼女たちは、私の気持ちを知っていて、あからさまに二人をからかった。

心を乱さないで…。

例え二人で歩いていても、手を繋いでいても、大丈夫。

彼に一番近いのは、この私…。

思い合う二人

移動教室の途中、後ろから肩を叩かれた。

「志保さん。一緒に行こう」

毛利さんは相変わらず笑顔で言った。

私が無言でいると、構わず毛利さんは私の横に並んだ。

「理科室まで遠いんだね。私、方向音痴だから…」
「そう」

興味はない。

どうせ彼女は、私の敵。

こうして私のこと、馬鹿にしてるんでしょ？

「志保さんは、他の人と一緒に移動したりしないの？」
「しないわ」

見ればわかるのに。

「でも園子言ってたよ。志保さんは本当はいい人なんだって」
「…園子？」
「うん。そう呼んでって言われたから」

小学生の頃も同じだった私ですら、名字なのに。

何もかも、彼女に劣っている。

ルックス、性格、友情、恋愛…。

どうして？

「新一もね、志保さんには感謝してるって。あいつ、素直じゃないから、あんまりそういうこと言わないと思うけど…」

新一

その言葉が出るたびに、私の心臓が何かに掴まれる。

苦しくて、もがきそうになる。

「志保さん…？」

彼女が私の顔を覗きこむ。

私はすぐに目を逸らした。

その時、男子が私たちの脇を走って通り過ぎた。

もちろん、その中には工藤君の姿もあった。

一瞬、彼がこちらを見た気がした。

でも、私を見ていない。

彼は彼女を見ただけ。

彼女もしっかり、彼を見ていた。

たったそれだけで、すごく苦しくなる。

私が俯いていると、彼女は私に、小さな声で言った。

「志保さんて、新一のことが好きなんですよ？」

「え…？」

思わず顔をあげて、彼女を直視する。

「そ、そんなこと…」

「すぐわかるよ」

彼女は笑顔を絶やさないまま続けた。

「私と同じ目をしてるもん」

同じ…目…？

「どういう意味？」

彼女は少し照れたような表情をした。

「今の志保さん、私と同じ目をして、新一を見る」

そっという彼女の顔は、少し赤くて…。

女の私でも、素直に可愛らしいと思えた。

でもそれは…彼を思っているからこそその表情。

彼女は彼が好き。

そして彼も、きっと彼女が好き。

思い合っている二人…。

私が入る隙間は、一ミリたりともない。

「あ、もう始まっちゃう！早く行こう、志保さん」

呆然としている私の手を、彼女は優しく引いた。

温かくて、柔らかい。

自分の冷たい手を、思わずぐっと固める。

負けたくない。

私よりも遥かに優れているこの人から…。

彼だけは取られたくない。

絶対に。

憎悪

最近、彼はうちに来なくなった。

朝も夜も、どこか別の場所に行っているらしい。

博士も心配しているみたいだけど、あまり色々と言わない方がいいと言われた。

聞かなくてもわかる。

彼はきつと、彼女の家に行っている。

彼女の家で、食事をご馳走になり、泊まってくること多くなっている。

彼との時間が減っていく。

学校でも減多に会話をしなくなった。

帰り道も、私は一人だった。

買い物の時、さりげなく荷物を持ってくれる彼の大きな手は、もういない。

そして増えていく、彼女との時間。

目を向けて見れば、必ず毛利さんと楽しげに話をする彼の姿。

その中には、彼女に対する気持ちがこもってて…。

私は唇を噛んで、目を逸らすことしかできなかった。

二人へのからかいが増えるにつれて、私の中の黒い心が大きくなっていく。

彼女が憎くて、疎ましくて、消してやりたいと思う心が…。

だってそうでしょう？

彼女がいなくなれば、彼の一番近くにいたのは、私だけ。

例えば彼が振り向いてくれなくても、私はずっと、彼の傍にいたことができる。

そうよ。

彼女さえいなくなれば…。

彼女さえ、
いなくなっ
てくれれば！

ねえ、あなたは私よりも、いろんなものを持っているでしょう。

一つぐらいくれたっていいじゃない。

私がほしいのは、彼だけなんだから…。

彼を返して…。

返してよ！

私の彼を返して！

黒い心

毎日彼女は、私に声をかける。

「志保さん、おはよう」

「ねえ志保さん、お弁当一緒に食べようよ」

「志保さんって、頭いいのね」

「羨ましいなあ」

決して嫌味ではないことはわかっている。

それどころか、彼女が私と仲良くしようとしていることも。

でも、私の中の黒い心が邪魔をして…。

「放っておいてくれる？」

つい冷たい言葉が漏れる。

だけど、彼女は少しも動じなかった。

「そっか、ごめんね」

いつも通りの笑顔を浮かべて、また去っていく。

それでも帰りになれば、また彼女は現れる。

「志保さん。一緒に帰ろう」

私が無言で進んでいくと、彼女は少し距離をおいてついてきた。

「私、これから用事があるんだけど」

ぶっきらぼうに嘘を吐く。

「じゃあ、途中まで。ね？」

毛利さんはそう言っつて、ついに私の隣に並んだ。

その後も、彼女は返事もしない私を相手に、様々な話をしていた。

喧嘩ばかりの両親、父親の仕事、小さい頃の思い出、彼とのこと。

「新一っつて、小さい頃からホームズオタクだね。家にあつた大きな本棚に、ホームズの本がぎっしり入っててさ…」

私はできる限り、彼女の声が入らないようにした。

「今でも同じみたいだし。ほんと困っちゃうよね。いつもホームズ、ホームズって…」

急に彼女は立ち止った。

「…新一」

私は彼女の視線の先を見た。

工藤君が手を振りながら、こちらに向かって走ってきていた。

「よっ。珍しいな」

工藤君は私達を交互に見つめた。

「新一、サッカー部の練習じゃ…」

「今日はもう上がり。帰ろうぜ」

「あ、ちよつと！」

スタスタと歩きだす工藤君を、毛利さんが慌てて追いかけた。

私はしばらく、その様子を呆然と見ていた。

傍から見れば、恋人も同然の雰囲気。

やっぱり私には、入る隙間がない。

「宮野？どうした？」

「志保さん。早くう！」

少し先では、二人が私を呼んでいる。

私はのろのろと進んだ。

これが夢だったらいいのに。

今すぐ目が覚めて、全部夢だったら…。

「お前、相つ変わらずだな」

「あんたに言われたくないわよ」

そう言いながら、クスクスと笑う。

私がいることを忘れているんじゃないかと思うほど、二人は仲がよくて…。

引き裂いてやりたい。

彼女の肩を掴んで、思いつきり彼から引き離してやりたい。

あと一步の所で、それができない…。

私は唇を噛んだ。

血が出てきそうなほど、強く。

信号を待つ間も、二人は夢中で話していた。

時折、彼女が振り返っては私の同意を求める。

だけど、それ以外ほとんど私は会話に加わっていなかった。

それよりも、彼女に対する憎悪が…。

私の黒い心が…。

私の脳裏に浮かぶ、恐ろしいこと。

それが、車の音でかき消された。

「ここ、車の通りがずいぶん激しいね…」

彼女がポツつと漏らした。

「雨の日に通ったら、大変そうじゃない？」

などと言って、二人で笑い合う。

私はぼんやりと顔をあげた。

今まで意識していなかったけど、ここはかなり車がたくさん通る。

人と車の接触事故も多いと聞いた。

ここで…彼女を押ししたらどうなる…？

ふと、そんなことが私の頭をかすめた。

私は怖くなって、頭を振った。

だけど、手はすでに前に出ていた。

やめなくちゃ…。

そう願っているのに、体がいうことをきかない。

黒い心はすでに、私の身体も支配していた。

思わずぎゅっと目をつぶった。

私の手に、一瞬だけ重みを感じた。

でもそれは、すぐに軽くなった。

耳をつんざくブレーキの音。

人々の悲鳴。

私は恐る恐る目を開けた。

彼女が、いない。

私が…押したから…？

だけど、それは違った。

「誰か轢かれたぞ！」

「救急車だ！早く！」

「おいボウズ、大丈夫か？」

そんな声が聞こえてきて、私はハツとした。

車道の真ん中に人だかりができていた。

その中心でぐったりしていた人が見える。

その人に、毛利さんが泣きながらすがっていた。

「新しい！」

工藤君…！？

事故

たくさんの人

止まる車

悲鳴

泣き叫ぶ彼女

血まみれの…彼

何が起こったんだろう。

私は間違いなく、この手で彼女の背を押した。

なのに彼女には傷一つなく、工藤君はあんな大怪我を…。

私は震える足で、工藤君に近付いた。

「工藤君…？」

毛利さんは私を見上げた。

殴る？

怒鳴る？

私は目をつぶった。

だけど、彼女は私の肩に手をおくと、がたがたと震えだした。

「志保さん…どうしよう。新一が…新一が…」

彼女の大きな目に涙がたまる。

「私がいけないの。ちよつとよろけて道路に出ちゃったから…。新一はそれを庇って…私の背中を押してくれたの。だから…」

私は混乱した。

彼女は、私が彼女を突き飛ばしたことに、気付いていないのだろうか。

「お嬢ちゃん達、この坊主の友達か？」

救急隊員らしき人が来て、私達にたずねた。

私は答えられない彼女の代わりに、少しだけ首を縦に動かした。

「じゃあ一緒に着いてきてくれるか？色々、聞きたいこととかもあるから」

そう言うと、隊員は私たちの肩をポンと叩いた。

「大丈夫だ。坊主は助かる」

本当に、大丈夫なのだろうか。

震えがまだ止まらない。

もし…彼がいなくなってしまうたら…。

私は生きていけない。

だってこの事故は、私が引き起こしたもの。

私が彼女を恨まなければ…。

私と彼女が出会わなければ…。

私と彼が出会わなければ…。

こんな事は、起きなかった。

彼は今も、笑っていた。

例えば隣に私がいなくても、彼はずっと、笑っていることができたのに。

「志保さん…」

救急車の中で、彼女が呟いた。

「新一…助かるよね？」

私は答えられなかった。

堅く目をつぶって、応急処置を受けている彼の姿から、目がそらせ
ない。

逸らしてはいけない。

彼が今こうなったのも、全部全部、私のせいなんだから…。

彼の指先が、ほんの少し動いた。

「新一っ!？」

彼女が急いで、彼の手を取った。

「新一、わかる？」

工藤君は、薄くだが目を開けた。

瞳をゆらゆらと揺らしていたけれど、彼女の姿に目を止めると、微
笑んだ。

そして、呼吸器をあてたまま、口を動かした。

「怪我…ねえか…？」

そう聞こえた。

こんな大怪我をした自分よりも、まず彼女のことを心配する彼。

毛利さんも一瞬戸惑ったあと、こくつと頷いた。

「私は平気だよ…。ありがとう、新一…ごめんね…ごめん…」

彼女は涙を流しながら、何度も謝った。

「謝んなよ…オレが、勝手にやったんだからよ…」

そう言うと、彼は目を閉じた。

「工藤君!？」

「新一、どうしたの!？」

私達は慌てて彼を揺すった。

すると、救急隊員の人が驚いた様子で止めた。

「だ、ダメですよ。今は安定してますから大丈夫です。眠っただけですよ。そんなことをしたら、余計に出血が…」

「す、すみません…」

彼女は俯くと、もう一度彼の手を握った。

「私のせいだね…いつもいつも、守ってもらって…」

彼女の顔に、いつしか笑みが浮かんだ。

「ねえ新一。新一っていつもそうだね。冷たいように見せかけて、ここぞという時に駆けつけてくれて…。いいところ取りだよ。馬鹿…」

彼が笑ったように見えた。

やっぱり私は、いない存在。

ここにいては、いけない人間。

私は人殺しも同然。

この世で一番大切な人を、こんな目にあわせた。

この世で一番大切な人の一番大切な人を、こんなにも苦しめている。

彼の一番近くにいるのは、彼女だ。

私ではない。

先に

工藤君はその日のうちに、米花総合病院へ緊急入院した。

出血があつたけど、そこまで傷は深くなかつたらしく、命に別条はないらしい。

良かった…。

すやすやと眠る彼の顔を見て、私はほっと胸をなでおろした。

彼の手を握つたまま毛利さんも寝付いてしまい、私は心苦しさを覚えながらも彼女に上着をかけた。

私はそのまま、病室をあとにした。

家に帰ると、電話をもらったという博士が慌てた様子で彼の両親に連絡を取っていた。

私が彼の容体を知らせると、博士は安心したようにそれを話していた。

「優作君達も、近いうちに一度帰ってくるそうだ」

「そう。それまでに工藤君も良くなっているといいけど」

私は敢えて明るく振舞った。

こうでもしないと、罪悪感に押しつぶされそうになる。

「夕飯、作るわね…」

喜ぶ博士をまともに見ることができずに、私は俯いたままキッチンに立った。

包丁を動かす間、私の脳裏に、先程の様子が蘇っていた。

行き交う車、笑い合う二人、黒い心に浸食された身体、一瞬だけ触れた背中、人々の悲鳴、車のブレーキ、すぎる彼女、横たわる彼…。

忘れよう、忘れなきゃ。

記憶をふっきるかのように、包丁を更に早く動かす。

それでも頭の中では、ずっとあの時の映像が流れていて…。

「いたっ…」

指から赤い血が出てきた。

包丁で切ったらしい。

指を咥え、止血をしている間、涙が出てきた。

彼はこれよりも、遥かに苦しんだ。

苦しめたのはほかでもない、この私…。

翌朝の空は、私の心とは正反対の快晴だった。

外に出て思わず、額に手をやった。

太陽のこの眩しさは、私には痛すぎる。

顔をうつむかせながら、私は学校へ向かった。

教室のドアを開けたら、いつも以上に視線が集中した。

それも当たり前なんだろうけど…。

私はそれを無視するかのように、席についた。

でも、私の前には数人の女子がいた。

「ねえ、工藤君が事故ったって聞いたんだけど？」

中心にいた、隣のクラスの工藤君のファンの子。

確か名前は…織田美由紀。

その子が私を睨んだ。

「ええ、そうよ」

「何その返事。幼馴染がそんな目に遭ったのに、心配してないわけ？」

私は思わず睨み返した。

「そんなわけではないでしょう」

「どうだか。工藤君、このクラスの女の子庇ったんでしょ？その子どこよ」

私は口を固く閉ざした。

毛利さんの名前を出すのは気が引けた。

「あんただってその子の事、恨んでんじゃないの？」

織田さんが言うと、他の女子が同調して言った。

「そうそう。工藤君、最近その子にべったりみたいだし？」

織田さんたちが一斉に笑った。

「もしかして、その子突き飛ばしたの、あんただったりして」

「やだ。逆恨み？」

「女の嫉妬って、醜いわよねえ」

図星をさされ、私は何も言えなくなった。

「あれ？何も言わないの？」

「まさかマジでやつちやった？」

「ちよっと皆注目。ここに殺人犯がいまーす」

その言葉に、私は顔をあげた。

「彼は死んでないわ。ちゃんと生きてる」

「あんたが言えることじゃないでしょ」

織田さんは冷たく言った。

私はぐつと唇を噛んだ。

その通りだった。

私にそんなこと言う資格はない。

彼をあんな目に遭わせたのは、私なんだから。

その時、教室のドアが開いて、毛利さんの顔が見えた。

顔が青白く、おはようという声には元気がなかった。

「当事者ご登場」

織田さんはニヤニヤとしながら、毛利さんの腕を引っ張った。

「な、何？」

毛利さんは混乱したように言うと、私の顔を見た。

私はつい、視線を逸らした。

「毛利さんって言ったっけ？昨日の事故のことなんだけど」

織田さんからの言葉に、彼女の顔が曇った。

「あの時毛利さん、誰かに背中押されなかった？」

楽しい顔をして恐ろしいことを聞く織田さんに、彼女の表情も強張った。

もう私はおしまいだ。

これで私は、完全な犯罪者だ。

そう思っただけは俯いた。

「何のこと？」

だからこそ、毛利さんがそう言った時、私は驚いた。

「あれは私がよろけただけ。新一が事故に巻き込まれたのは、私のせいなの」

「毛利さん、この人のこと庇ってんの？」

織田さんは目付きを鋭くさせた。

「正直に言っているのよ。私はこの人に殺されそうになりました、って」

そう言うと、織田さんは再び笑い声をあげた。

だけど、逆に彼女は表情を険しくさせた。

「志保さんがそんなことするわけないでしょ！本当にあの事故は、私がドジやって起きただけなの」

その頑とした口調に、私は悟った。

彼女は気付いている。

私が彼女に殺意を抱いていたことも。

私が彼女を突き飛ばしたことも。

全てを知ったうえで、彼女は私を庇ってくれている。

だけど、織田さんは笑みを絶やさなかった。

そして、先程と同じ口調のまま、私達二人にだけ聞こえるような声で囁いた。

「私、見ちゃったんだよね。あんたが毛利さんの背中を押して、道路に突き飛ばしたところ」

背筋が凍るような感覚がした。

見られてた…？

「そ、それは気のせいよ！きっと志保さんは、私を助けようとして…」

毛利さんが反論しようとしていたけど、それより先に、私は動いていた。

彼女たちの前を遮って、教室を飛び出した。

「志保さん!？」

後ろから彼女が私を呼びとめる声が聞こえてきた。

でも、振り向けなかった。

私は重い足を無理矢理動かして走り続ける。

行先は…屋上。

私は屋上から下を見下ろした。

まだホームルームが始まる前。

遅刻ぎりぎりの生徒たちが駆けこんでいる様子が見えた。

あの中に、工藤君がいてくれたら…。

そんなことを考えてから、私はフツと笑った。

手すりを越えて、空を見上げる。

青い空が眩しくて、目が痛くなった。

そのまま、宙に向かって一歩踏み出した。

まるで、そこに地面があるかのように。

だけど地面なんてあるわけもなく、私の身体はゆっくりと前のめりになった。

目を閉じて、少しだけ微笑んだ。

上の方から、誰かの叫び声が聞こえてきた。

それでももう、私の身体は止まらない。

工藤君…

先に逝くわ…

覚醒（前書き）

ここから新一の目線になります。

覚醒

オレが目を覚ましたのは、事故から三日後だった。

ゆっくり瞬きを繰り返していると、久しぶりに見る両親の姿があった。

母さんはオレが起きたことに気付くと、歓声をあげてオレに抱きついた。

「新ちゃん！良かった、気がついて」

相変わらずの元気ぶりに、オレは呆れつつも安心した。

けれど、別のことを思い出した。

「蘭は？あいつ無事か？」

「落ち着け、新一」

父さんは冷静な口調でオレを窘めた。

「蘭君なら大丈夫だ。掠り傷一つない」

「そ、そうか…」

オレはホッとして息を吐いた。

自分の身体を見下ろすと、所々に包帯がある。

頭に手をやれば、微かに痛みが走った。

「よく帰って来れたな」

締め切りに追われて忙しいはずなのに。

「息子が事故に遭ったと聞いては、帰って来ざるを得ないだろう」
「どうか」

オレはもう一度枕に頭を預けた。

「新ちゃん、いくら蘭ちゃんが危なかったからって、もう少し助ける方法があつたんじゃないの？」

「何だよ、それ」

「腕を引つ張るとか、抱きかかえてあげるとか…」

母さんの頓珍漢な言い分に、オレと父さんは何も言えなかった。

「と、とにかく、新ちゃんが車の前に出ることはなかったんじゃないかって言ってるのよ！」

「あの状況じゃ、蘭を更に強く押して、向こう側まで追いやることしかできなかったんだよ」

父さんも頷いた。

「身を呈して女性を守ることができたのはいいことだ。ま、今度は自分が怪我をしないようなやり方を選びなさい」

そう言ってオレの頭をポンと叩いた。

「蘭ちゃんが大好きなのはいいけど、こんな危ないことしちゃダメよ」

「べつ、別に好きじゃねえよ!」

「あら、赤くなっちゃって。可愛いんだから」

母さんがオレをツンとつつけば、父さんも一緒になって笑いだす。

これが久しぶりに会う親子の会話なんだろうか…。

「それで、蘭は?」

「慌てないの。もうそろそろ来るわよ」

オレはぼんやりと時計を見た。

今頃、学校は帰りのホームルームの時間のはずだ。

となると、蘭が来るのは、早くても一時間は先だろう。

その間、オレは点滴やらMRIやらを受けさせられた。

明日にはもっと色々な検査を受けることになるだろうけど、できることなら蘭に会いたい。

別に…心配してるだろうから、ってただけだな。

母さんがオレのベッドの脇でリンゴの皮を剥いている頃、蘭はやってきた。

「新一!」

そう叫んでから、ベッドから身を起こしているオレを見て、ぼろぼろと泣きだした。

「お、おい」

突然のことにおろおろしていると、母さんが立ち上がって、ニヤニヤしながら病室を出てった。

「泣きやめよ」

「馬鹿…誰のせいで…」

言いながら蘭は、涙をぬぐった。

「ごめんね…」

「謝んなったつたろ。お前のせいじゃないぜ？」

オレがそう言っても、蘭はまだ泣いている。

「いい加減に…」

言いかけたオレを遮って、蘭は震える声で漏らした。

「私、新一だけじゃなくて…志保さんまで…」

「宮野？」

思わぬ名前に、オレは聞き返した。

「宮野がどうかしたのか？」

更にたずねてみたが、蘭は答えない。

「蘭…」

背中に手をあて、そっと撫でてやる。

しばらくすると、蘭は呟いた。

「志保さんが、学校の屋上から飛び降りたの」

大事な

蘭から宮野のことを聞いて、オレ達は病室を飛び出した。

外で耳を欹てていたらしい母さんが驚いていたけど、気にしちやいられない。

何で宮野が自殺なんか…。

嘘だろ？

「きつと私のせいだ…」

蘭はまだ泣いていた。

「私が志保さんのこと、追い詰めちゃったんだ」

「何言ってるんだよ。あいつはそこまで弱い奴じゃねえよ」

だからこそ、不安だった。

普段は無表情で何を考えているかわかんねえけど、あいつは自殺をしようと思うほど馬鹿じゃない。

何かあったんだ。

だけど、蘭はそのことについては話してくれない。

「下が植木になってたから助かったの。でもまだ目を覚まさなくて

…」

そう言いながら、しきりに涙をぬぐっていた。

宮野志保と書かれた札のある部屋の中。

その中に、阿笠博士が呆然としながら座っていた。

「博士」

オレはそつと声をかけた。

博士はぼんやりとこちらを見た。

少しだけやつれているような気がする。

「ああ、新一君か…さっき優作君が来て、君が目を覚ましたことを聞いたんじゃが、志保君がこの状態で、いけなくての…」

「そんなことはどうでもいい！いきなりどうしたんだよ！？」

思わず怒鳴った。

でも、博士は首を横に振った。

「わからん。一昨日、急に学校から電話がきて…。志保君が屋上から落ちて怪我をしたと言うもんじゃから、わしも混乱しとる。当の本人は起きる気配すらない」

博士は宮野の頬に触れた。

「わしがいけなかったんじやろうか…。この子は優しいからの、辛いことも全て自分の中にしまいこんでしまう。何かあっても、わたしは何も話してくれん…」

「博士は悪くねえよ。こいつが起きてからでも話は聞けるだろ」

そうは言うものの、内心では無理だとわかっていた。

宮野は昔から、自分の心は誰にも開かない。

家族がいなせもあるだろうけど、とにかく素直じゃない。

そんなこいつに問いただしたところで、本当のことを言うとも思えない。

「わしがこつそりすき焼き弁当を食べたのがいけなかったのかの…、黙ってチョコレートパフェを食べたことかの…それとも、コーラを

…」

「もういいよ、博士」

震える博士の背中を、オレは撫でた。

蘭が静かに隣に来て、宮野の手を取った。

「志保君の友達か？」

博士が蘭を見てたずねた。

「毛利蘭といえます」

「ああ…新一君がよく話しておった、幼馴染の…」

蘭はきよとんとして、チラッとオレを見た。

だけどオレは、すぐに目を逸らした。

「友だちが来てくれれば、志保君も喜ぶじやろ…早く目を覚ましてくれるかもしれんの」

「そうですね」

真剣な目で宮野の手を握る蘭。

オレも、祈らなくちゃ。

神様なんて普段は信じちゃいねえけど、今は別だ。

オレは宮野の反対の手を取って、ぎゅっと握った。

このまま死ぬんじゃないぞ、絶対。

お前も、オレの大事な幼馴染なんだからよ。

笑顔

初めて宮野と会った時、あいつは笑うことを忘れていた。

家族が突然の事故で亡くなってから、あいつはずっと無表情のままだった。

オレは最初、そんなあいつが可愛くねえと思っていた。

博士が何とかしてあいつを笑わせようと、くすぐりマシンまで開発しているのを見て、オレはこいつを笑わせてみようと思った。

オレは毎日、あいつに話しかけた。

初めは無愛想で、口も開かなかったけど、日を重ねることにあいつはオレと話すようになった。

あいつが来てから一年も経った頃。

学校帰りに、あいつが捨て猫を見つけてきた。

まだ小さくて、もう弱り切っていた。

すぐ死ぬことは目に見えていたけど、あいつは構わず世話をしていた。

オレと博士は止めたけど、あいつはやめなかった。

結局、その猫は二日後に死んだ。

宮野は無表情のまま言った。

「あの子は私ね」

オレがどういう意味かとたずねたら、あいつは顔色一つ変えずに告げた。

「こうしてずっと独りぼちのまま、寂しく死んでいくのよ。誰からの愛情も受けられないまま」

正直言っただれた。

「お前、そんなこと思ってたのかよ？」

オレはもう冷たくなった猫を抱きあげた。

「こいつは最後に、あつたかい世話をしてもらったじゃねえか。独りぼちなんかじゃねえよ。お前だって、博士もいるし、オレもいる。一人きりの人間なんて、いやしねえんだからよ」

あいつの頬が何かで光った。

宮野が初めて表情を変えた。

泣いていたけど、小さい声で、ありがとうと呟いているのが聞こえた。

次の瞬間に、あいつは笑っていた。

宮野が目を覚ましたと知らせがあったのは、次の日だった。

オレは蘭と一緒に、急いで宮野の病室に向かった。

そこには、博士と談笑している、いつものあいつの姿。

「宮野！」

オレは病院内だと言うことも忘れて大声を出した。

「よかった…志保さん、助かって」

オレの隣で、蘭も嬉しそうに言って、また泣いている。

だけど、宮野の表情は強張っていた。

「あ、オレなら平気だぜ。ちょっと頭打っちゃったみたいだけど」

オレは頭をポンと叩いてみせる。

それでもオレと蘭を見つめる宮野の目は変わらない。

十年前のあいつのようだった。

「おい、どうしたんだよ」

「志保さん…？」

オレ達は不安になって、宮野を見た。

宮野はオレ達をまっすぐ見たまま、こう言ったんだ。

「あなた達、誰？」

誰？

オレは意味がわからず、渴いた笑い声を出していた。

「お前、何言ってるんだよ？」

嘘だと思いこもうとした。

その癖、嘘じゃないことは嫌というほど理解していた。

こいつはそんなつまらない嘘をつくような奴じゃない。

そんなの、オレが一番よく知ってる。

「志保君、どうしたんじゃない？ 新一君じゃぞ。それに、友だちの蘭君じゃ」

博士が混乱したように言うと、宮野はぼんやりとしたように繰り返した。

「しんいち……らん……」

その瞬間、なぜか頭を抱え込んだ。

「宮野！？」

「志保さん！」

宮野はぶつぶつと言っていた。

「わからない…誰？誰なの！？私、知らない…！」

蘭が呆然としてオレを見た。

「宮野、この人誰かわかるか？」

オレは咄嗟に博士を指差した。

「阿笠博士」

宮野はオレを怪訝な表情で見つめた。

「近所の喫茶店のおっさんは？」

「山内さん」

「鳥矢町に住んでる博士の友達は？」

「西嶋さん」

啞然としてしまう。

どうということなんだろう。

「志保さん、私のこと、覚えてないの？」

蘭がそう言って宮野の手を握ったが、宮野は怯えたような目で蘭を見てから、その手を振り払った。

「わからない。あなた、誰…？」

「志保さん…」

信じがたいことだけど、宮野の頭の中には、オレと蘭だけが存在しない。

そこだけがぼっかりと抜け落ちているようだった。

「志保君、本当にわからんのか？」

博士はショックを受けたようで、宮野をオレ達の方へ向かせた。

「君の幼馴染の工藤新一君、友だちの毛利蘭君じゃぞ」

しばらくの間、宮野の目はオレ達の方へ向いていたけれど、なぜだかそれを逸らした。

「悪いけど…本当に覚えてないの」

そう言うと、布団にもぐった。

「帰って。今は疲れてるの…」

「でも…」

蘭が何か言いたげだったけど、オレは黙ってドアノブに手をかけた。

「新一？」

「行くぞ、蘭。今はそっとしておいてやれ」

それがオレにできる、唯一のことだった。

例えあいつが何も覚えていなくても、あいつはオレの幼馴染だ。

何があっても、オレはあいつを守らなくちゃ…。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0237ba/>

哀しき愛

2012年1月12日08時56分発行